論　文

近代知多地方の企業勃興

―丸三麦酒と地方資産家―

橋　口　勝　利

はじめに

本稿の目的は、近代における知多地方の企業勃興について、ビール産業を事例に検討することである。本稿の意義を明確にするために、以下に２つの分析視角を提示する。

第１に、ビール産業の本格的な実証研究を推し進めることである。ビール産業は、明治期以降、海外から委嘱された産業で、現在でも日本の主要企業の一翼を担っている。しかし、近代のビール産業がどのように生まれ、成長していったのかという経営分析については、概説を除いて本格的な研究は進んでいない。そのなかで丹治雄一は、1906年に成立した大日本麦酒株式会社が、合併と特約店販売網を強固に構築して販売力を強化しつつ、大資本へと成長する過程を描いている。しかし、企業勃興期を対象としたものではないため、ビール産業がどのようにして生まれて成長したのかが不明確である。加えて、具体的な企業経営分析もいっそう進められなければならない[1)]。そこで本稿は、西洋からの移植産業だったビール産業がどのようにして成立し、経営基盤を固めていったのかという点に注目しながら分析を進めていく。対象とする丸三麦酒株式会社（以下、丸三麦酒と略す）は、1896年に愛知県知多地方に設立された企業であるため、地方の企業勃興を分析するうえで適した事例である。

第２に、知多地域の資産家とビール産業との関わりについてである。企業勃興期を対象とした研究では、地域の資産家がその出資者あるいは経営者として貢献する事例がいくつも明らかにされている。それだけでなくこの資産家は、地域の複数の企業に経営参加し、その企業群を軸に資産家グループを形成することが多かった[2)]。丸三麦酒についても、知多地方の

１）丹治雄一「大日本麦酒の経営と販売網―ビール業成長期下の経営活動と特約販売網の整備―」『社会経済史学』第67巻第３号，2001年９月。なお、この論考では、日本麦酒鉱泉（丸三麦酒の後継企業）の合併が、大日本麦酒の販路拡大に貢献したことも指摘している。

２）鈴木恒夫・小早川洋一・和田一夫『企業家ネットワークの形成と展開』名古屋大学出版会，2009年。

資産家が、グループを形成しつつ、その設立や経営に参加していた。しかし、こうした資産家グループが企業経営や経済情勢の変化の中で、どのように継続したのか、あるいは変容していったのかという点への分析は未だ不十分である。それゆえ本稿では、資産家グループの機能について明らかにすることを目的としたい。なお、この分析を進めていくにあたり、知多の有力資産家の小栗三郎を取り上げる。小栗三郎は、家業として醸造業を営むものの、この知多地方の有力企業の丸三麦酒や知多紡績株式会社（以下、知多紡績と略す）の設立や経営に参加している。中西聡の研究では、この小栗三郎は、「知多紡績への設立には全力で取り組んだ」が、丸三麦酒への関与については、「丸三麦酒への関与は名前貸し程度」にとどまったと指摘している。加えて小栗三郎は、丸三麦酒の取締役を、設立間もない1899年で退任したことから、経営への積極的な関与はうかがえない[3)]。小栗三郎の丸三麦酒の株式保有についても1906年までにとどまっており、その投資行動の特徴は、事業志向で地域志向、そしてリスクに非感応的だったことも指摘されている[4)]。つまり小栗三郎は、丸三麦酒の企業経営についての貢献は、総じて弱かったものと考えられる[5)]。だとすれば、企業勃興に貢献した資産家は、その企業関与に多様性が見られ、その行動の動機や様式が複雑に組み込まれつつ資産家グループに結集していたことになる。それゆえ本稿では、この小栗三郎だけでなく、丸三麦酒の経営を主導した資産家の中埜家や盛田家の視点をも含みつつ、資産家グループの実態に迫りたい。

本稿で対象とする丸三麦酒は、表１の年表に記したように、1896年に知多郡半田地方の有力資産家によって設立され、資本金は60万円に達していた。これは、当時の有力ビール会社であった札幌麦酒（資本金30万円）、日本麦酒（資本金130万円）、大阪麦酒（資本金100万円）に匹敵する。つまり全国的にも大規模な麦酒会社であったことがわかる。しかし、1906年には事実上合併され、日本第一麦酒株式会社へと姿を変えてしまうことになった[6)]。

なお。本稿では、小栗三郎家の経営一次史料「丸三麦酒株式会社書類（資料ナンバー147-4)」および「麦酒会社・紡績会社書類（資料ナンバー147-9）を主として使用する。これらは、小栗三郎が丸三麦酒の役員として経営に関与した期間に作成された文書である。この文書を駆使しつつ課題の解明に努めたい。

3）中西聡「半田・亀崎地域の「企業勃興」と有力事業家」（中西聡・井奥成彦編『近代日本の地方事業家』日本経済評論社，2015年）。

4）花井俊介「有価証券投資とリスク管理―明治後期～昭和戦前期」（中西聡・井奥成彦編『近代日本の地方事業家』日本経済評論社，2015年）。

5）小栗三郎は、1906年、株式投資をやめ、家業に専念し地方事業家へ進んだ。中西聡・井奥成彦編『近代日本の地方事業家』日本経済評論社，2015年。

6）『半田市誌　本文篇』（1971）愛知県半田市，511-515頁。

表１　　丸三麦酒株式会社の関連年表

年	月	丸三麦酒関係	麦酒業界関係	小栗三郎関係
1876			開拓使麦酒製造所設立	
			（のち、札幌麦酒（株））	
1887		丸三麦酒醸造所設立（４代目中埜又左衛門）	日本麦酒醸造会社が札幌麦酒会社設立	
1885			ジャパン・ブルワリー・コンパニー設立	
			（のち、麒麟麦酒（株））	
1888	5		ジャパン・ブルワリーが「麒麟ビール」発売	
	8		札幌麦酒会社が「札幌ラガービール」発売	
1889	5	「丸三ビール」発売（初年度醸造量200石）	大阪麦酒会社設立	
1890	2		日本麦酒醸造会社が「恵比寿ビール」発売	
1892	5		大阪麦酒会社が「旭ビール」発売	
1893			札幌麦酒株式会社へ改組	
1896	9	丸三麦酒株式会社へ改組		監査役へ就任
		（５代目中埜又左衛門ら）		
			「恵比寿ビール」と「麒麟ビール」の競争激化	
1897	7	醸造設備		
		（ドイツ・ゲルマニア機械製造所）到着		
	10	ドイツ人機械技師（Ｆ・フォーゲル）到着		
1898	6	醸造技師（Ｊ・ボンゴル）到着		
	11	新工場竣工、醸造開始		
1899	7	「カブトビール」発売		
1901	3		「麦酒税法」公布（造石税　１石７円）	
	6			監査役を辞任
1904	4		「非常特別税法」（１石７円50銭へ）	
1905	1		「非常特別税法」改定（１石8円へ）	
	5	払込資本金30万円（８分の配当）		
1906	3		大日本麦酒株式会社成立	
			（札幌・日本・大阪麦酒の3社合併）	
	10	根津嘉一郎が買収。		
		日本第一麦酒株式会社へ改組・改称。		
1907			麒麟麦酒株式会社が設立	
1908	3		「麦酒税法」改定（１石10円）	
	7	加富登麦酒株式会社へ社名変更		
1909		配当金７分に減配		
1914		配当金５分に減配		
1921	5	日本麦酒鉱泉株式会社へ合併		
		（帝国鉱泉（株）・日本製壜（株）との合併）		
1922		ユニオンビール発売		
1925	5	金線飲料株式会社を合併、		
		資本金1,000万円へ増資		
1933		大日本麦酒株式会社へ合併、		
		資本金9,400万円へ増資		

資料）『サッポロビール120年史』などから報告者作成。

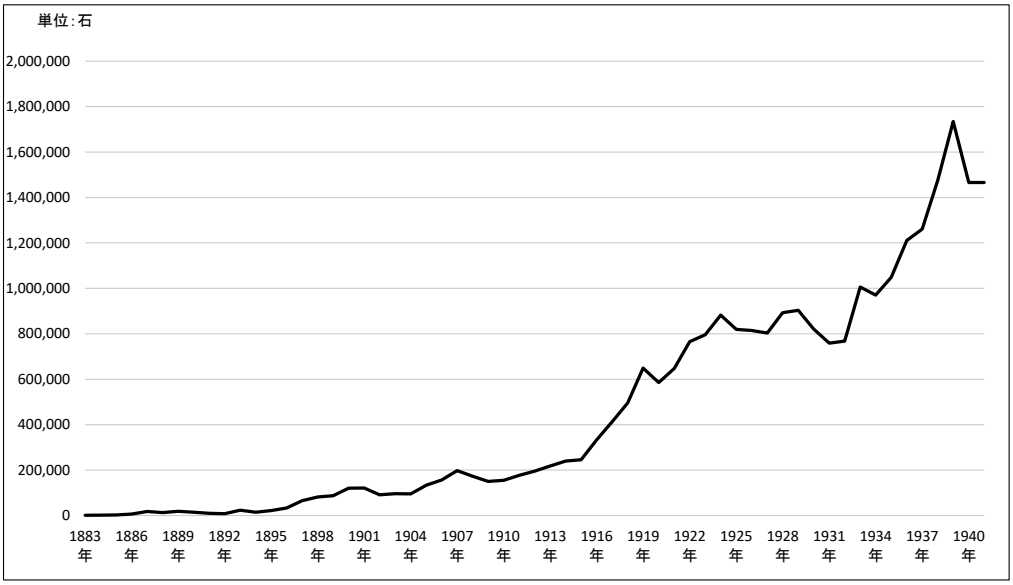
〔1〕 ビール産業の誕生と丸三麦酒

（1） ビール産業の誕生

知多地方でビール産業が誕生した要因は、酒造業の不振にあった。知多地方では、酒造業が明治10年ごろから急速に衰退し始めた。それは、交通機関の発達が競争を激化させ、酒造税の大幅な引上げが経営を圧迫したからである。そのため、知多半島の酒造業者は危機感を強め、新たな事業として麦酒産業に期待することになった[7)]。

当時は、文明開化が進み、ビールの消費が普及し始める時期にもあたっていた。ビールの

7）『半田市誌　本文篇』（1971）愛知県半田市，431頁。



資料）『サッポロビール120年史』より作成。

図１　ビール製造量の推移

生産量を示した図１をみれば、対象時期の1890年代から1906年は、ビール産業の創成期にあたっていたことがわかる。知多地方では、1884（明治17）年頃に先駆的なビール企業が現れた。例えば、盛田久左衛門（小鈴谷村・酒造家「ヤマイゲタ」）が「三ツ星ビール」を、そして竹本久三郎（半田）が「半田ビール」を醸造し販売した。しかし、いずれの事業も経営の存続は難しかった[8)]。

（２）　丸三麦酒の誕生

１　丸三麦酒醸造所の誕生

丸三麦酒の前身となった丸三麦酒醸造所は、1887（明治20）年、４代目中埜又左衛門が発案し、盛田善平が奔走することで発足した。盛田善平は、「三ツ星ビール」を醸造した盛田家の人物であり、中埜又左衛門の甥にあたっていた。中埜又左衛門は、その血縁関係を礎にしてビール事業への進出を盛田善平に提案した。これに応じて盛田善平は、中国人技師や、桜田麦酒の技師を雇うことで丸三麦酒を発足させた。しかし、生産量は１年で400石に止まり、そのシェアは全国の１％にすぎなかった[9)]。

当時の事情を記した『ビールレーベル興亡史』によれば、「創業当時から東京の市場をね

8）『サッポロビール120年史』サッポロビール株式会社（1996），188頁。

9）植田敏郎『ビールのすべて』中央公論社，1962年，74-75頁。なお、盛田善平は、盛田家の多角化を担う役割にあった。中西聡・二谷智子『近代日本の消費と生活世界』吉川弘文館，2018年，66頁。

らったが、関東には桜田、浅田、エビス、サッポロ、キリンあり、そのうちでもそのころ桜田ビールが最も積極的で、丸三ビールは販売、宣伝にはすこぶる苦労した。そのころの醸造高はわずか四百石、全国ビールの一％に過ぎなかった。」[10] と丸三麦酒は評された。つまり、丸三麦酒は、東京や大阪市場をめぐって桜田麦酒や恵比寿麦酒などと販売競争に晒され、その競争に打ち勝つためには、広範囲な販売網を構築しなければならなかった。しかし、丸三麦酒の創業当時は、大手卸店への販売交渉は不調で特約店販売網の構築は難しかった[11]。そのため、中埜酢店の一手販売店の中井半三郎に特約店を依頼し[12]、宣伝活動を強化することで生き残りを図った[13]。

2　丸三麦酒の誕生

1896年９月、５代目中埜又左衛門は、丸三麦酒醸造所の製造能力の増強と品質向上を図るべく、丸三麦酒を設立した。この丸三麦酒は、丸三麦酒醸造所から機械等を購入し[14]、1899年６月25日に開業式を迎えて操業が始まった。この事業拡大の背景には、ビール事業への見通しが明るくなったことが一因であった。丸三麦酒の設立趣意書には、「本年（＝1896年：筆者）ノ醸造高ハ推スルニ約四萬石ナリト云ヘバ恐クハ無限ノ需用ニ應ズルニ足ラザルベシ而シ翻テ其製造所ヲ見レハ一起一伏ノ間現今完全ナル器械ヲ備フルハ東京ニ日本麥酒株式會社横濱ニ麒麟麥酒醸造所大坂ニ朝日麥酒株式會社札幌ニ札幌麥酒株式會社ノ四アルノミ其他數多ノ醸造所ハ所謂模造器械ヲ備フルノミ夫レ此ノ如クシテ能ク膨大ノ進運ニ應ズルヲ得ベケンヤ是レ乃チ我丸三麥酒ガ更ニ組織ノ規模ヲ擴張シ此迫リタル大需用ニ應ジテ奮發スル所アラントスル所以ナリ（下線：筆者）」[15] と記している。つまり、当時のビール需要は高まっていたものの、ビール企業の数が限られていたためにその需要に応じることが出来なかった。そのため、丸三麦酒は、株式会社として規模を拡大することにしたのである。当時の知多新聞によれば、「丸三麥酒株は事業に着手し殊に麥酒は一種獨特の事業なれば最も前途有

10）三宅勇三『ビールレーベル興亡史』1964年，20頁。
11）『サッポロビール120年史』サッポロビール株式会社（1996），188-189頁。
12）中井半三郎は東京を拠点とし、丸三麦酒の製品を自身の取引先の各酒店から売り出した。しかし、売掛金が１、２年も回収できず、厳談した場合は返品数が前年度出荷数を超えてしまうこともあり、販売は困難を極めた。愛知県半田市『半田市誌　本文篇』1971年，510頁。
13）『サッポロビール沿革誌』大日本麦酒（1936），163頁。盛田家は、近世後期以降から酒造業を家業とし、販路は江戸が中心であった。近代に入って、静岡県へ販路を拡大し、清水や沼津などの中埜家と共同で酒販売店を開設したという。おそらく、丸三麦酒もこの販路を踏襲していたと考えられる。中西聡・二谷智子『近代日本の消費と生活世界』吉川弘文館，2018年，64頁。
14）『サッポロビール120年史』サッポロビール株式会社（1996），189-190頁。
15）「丸三麥酒株式會社發起趣旨書」（竹内進編『資料　カブトビール』1996年，64頁）。

望の株なれば益々高く三十圓以上の聲価なり爲に知多郡地方は右の二大會社株の好況にて大いに春めきし模様なり（下線：筆者）」[16] と、丸三麦酒は知多紡績と並んで有望企業だったことが記されている。

丸三麦酒は、丸三麦酒醸造所の時代とは異なって、すべて新しい技術と設備を取り入れることとして、ドイツから専門技師を招くこととした。知多新聞には、「丸三麥酒株式會社の開業式を祝す　我が社會の進歩と共に百般の事業亦進歩すと雖も麥酒醸造の如きは比較的其發達遅く爲に夥多なる需用者に満足を與ふる能はざりしのみならず麥酒は最良の輸出品たるにも拘はらず少しも之を利用する能はざりしは吾人の甚だ遺憾とする處なりしが今や時運の大勢は驅つて麥酒醸造の後來有望なる事を國民の腦裡に染ましめたると共に漸く其事業盛んならんとす此際我が知多半島は逸早くも我國中屈指の丸三麥酒大會社を創立し最も新式の器械を装置し精錬なる外國技師を傭使して全國無比の最上麥酒を醸造するに至る（下線：筆者）」[17] と記されている。このように、最新式の機械とドイツ人技師を迎えて、丸三麦酒は全国屈指の競争力を有することになったのである。事実、丸三麦酒の生産規模は、全国的に見ても大きかった。知多新聞は、丸三麦酒の製造能力について、「…新麥酒は名を兜と稱し發賣し當分の内醸造高は六七千石なれど現今の器械は一萬五六千石を醸造し得べきに付漸次此の醸造高に達するの計畫なりと云えば前途有望の會社と云うべし（下線：筆者）」[18] と記している。つまり、丸三麦酒は、6,000～7,000石の生産量を誇っていた。当時の主要ビール企業の生産量を比較した表２を見れば、1895年時点のビール醸造量は、日本麦酒が7,184石、大阪麦酒が5,415石、麒麟麦酒が7,300石であったことから、丸三麦酒の生産力の大きさは、全国屈指の位置にあったことは間違いない。

販路についても丸三麦酒は、丸三麦酒醸造所の得意先を引き継いでいたものの、新たな販路の構築にも乗り出した。知多新聞によれば、知多地域の販売を特約店に委ねていたことが記されている。

「特別廣告　　丸三麥酒株式會社新式器械醸造カブトビール
　知多郡一手特約大販賣結約致候ニ付多少ニ不拘御注文程希上候
　尾州半田本町　六月　二徳商店
　新文亭　小栗及兵衛　　觀古堂　小栗参平　（下線：筆者）」[19]

と記されているように、知多地域では、二徳商店へ特約販売契約を結ぶことで販売の強化

16)「知多紡績及丸三麥酒株の騰貴」『知多新聞』1899年３月３日。
17)「丸三麥酒株式會社の開業式を祝す」『知多新聞』1899年６月25日。
18)「丸三麥酒會社」『知多新聞』1899年２月28日。
19)「特別廣告」『知多新聞』1899年６月20日。

表２　主な麦酒メーカーの製造量

企業名	1895年		1906年		1921年	
	製造量	%	製造量	%	製造量	%
日本麦酒（株）	7,184	21.9	112,428	71.8	408,901	63.2
大阪麦酒（株）	5,415	16.5				
札幌麦酒（株）	1,705	5.2				
麒麟麦酒（株）	7,300	22.2	31,770	20.3	127,012	19.6
上位４社 小計	21,604	65.7	144,198	92.1	535,913	82.8
日本麦酒鉱泉（株）	―	―	8,747	5.6	36,306	5.6
桜麦酒（株）	―	―	―	―	55,371	8.6
日英醸造（株）	―	―	―	―	19,042	2.9
その他	11,263	34.3	3,695	2.4	752	0.1
全国合計	32,867	100.0	156,640	100.0	647,384	100.0

注１）「1895年」の各社の製造量と全国の合計値とが一致しない可能性があるが、そのまま掲載する。
注２）「1906年」と「1921年」については、各社製造量と全国の合計値は一致する。
注３）日本麦酒（株）・大阪麦酒（株）・札幌麦酒（株）は、1906年に合併して大日本麦酒（株）となった。
注４）製造量の単位は「石」。
資料）『サッポロビール120年史』。

を図ったのである。

３　丸三麦酒の経営

丸三麦酒の経営を指揮した役員の変遷を表３で検討する。表３からは、時期ごとに役員の顔ぶれが次第に変化していることがわかる。まず、1897年１月～1900年１月は、創業時のメンバーで役員が構成された時期にあたっていた。丸三麦酒は中埜家と盛田家のイニシアチブで設立されたため、中埜半左衛門が取締役社長になった。加えて、小栗平蔵や田中平八、小栗富治郎そして小栗三郎などの半田町の有力資産家がメンバーに名を連ねていた。そして1899年１月をみると、中埜又左衛門が社長を引き継いで、盛田善平が常務取締役となった。そして1902年以降から中埜家と盛田家の存在が大きくなっていった。しかし、1907年７月になると小栗三郎が監査役を離れ、続いて1901年７月に田中平八が監査役を離れるなど、半田町の資産家の離脱が見え始めた。そして1905年、長坂重孝[20]が取締役社長に就任することで、中埜家の関与が弱まり始めた。丸三麦酒は、1906年に日本第一麦酒へ改組したことを機に、根津嘉一郎が取締役社長に就任して、創業時の役員構成とは大きく異なった陣容へと変貌を遂げた。

丸三麦酒の設備資金の調達について表４を用いて検討する。丸三麦酒は、払込株金などの自己資金が大きいため、期間を通じて設備資金をカバーしている。しかし、1899年から当期純益金のマイナスが続き、前期繰越金も悪化の一途を辿った。1902年７月から15万円の社債

20）長坂重孝は、丸三麦酒設立時の1896年には知多郡長であった。愛知県半田市『半田市誌　本文篇』1971年，425頁。

表３　　丸三麦酒の役員の変遷

年	月	取締役社長	常務取締役		取締役						支配人	監査役			
1897	1	中埜半左衛門			小栗平蔵	中埜半六	田中清八	小栗富治郎	鈴木宇兵衛			盛田久左衛門	小栗三郎	山内正義	中井半三郎
	7	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…
1898	1	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…
	7	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…
1899	1	中埜又左衛門	小栗平蔵	盛田善平	中埜半左衛門	中埜半六	田中清八	中井半三郎			大澤榮三	盛田久左衛門	小栗三郎	山内正義	
	7	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…
1900	1	中埜又左衛門	小栗平蔵	盛田善平	中埜半左衛門	中埜半六	田中清八	中井半三郎			大澤榮三	盛田久左衛門	小栗三郎	山内正義	
	7	中埜又左衛門	小栗平蔵	盛田善平	中埜半左衛門	中埜半六	田中清八	中井半三郎			大澤榮三	盛田久左衛門	中埜純平	山内正義	
1901	1	中埜又左衛門	小栗平蔵	盛田善平	中埜半左衛門	中埜半六	田中清八	中井半三郎			大澤榮三	盛田久左衛門	中埜純平		
	7	中埜又左衛門	小栗平蔵	盛田善平	中埜半左衛門	中埜半六		中井半三郎				盛田久左衛門	中埜純平	田中清八	
1902	1	中埜又左衛門	小栗平蔵	盛田善平	中埜半左衛門	中埜半六		中井半三郎	中埜良吉			盛田久左衛門	中埜純平		
	7	中埜又左衛門	小栗平蔵	盛田善平	中埜半左衛門	中埜半六		中井半三郎	（岩瀬弥助）			盛田久左衛門	中埜純平	松田有信	
1903	1	中埜又左衛門	小栗平蔵	盛田善平	中埜半左衛門	中埜半六	盛田久左衛門	中井半三郎				草郷清四郎	中埜純平	松田有信	
	7	中埜又左衛門	小栗平蔵	盛田善平	中埜半左衛門	中埜半六	盛田久左衛門	中井半三郎				草郷清四郎	中埜純平	松田有信	
1904	1	中埜又左衛門	小栗平蔵	盛田善平	中埜半左衛門	中埜半六		中井半三郎				草郷清四郎	中埜純平	松田有信	
	7	中埜又左衛門	小栗平蔵	盛田善平	長坂重孝	中埜半助		中井半三郎				草郷清四郎	中埜半左衛門	中埜良吉	
1905	1	長坂重孝	小栗平蔵	盛田善平	中埜又左衛門	中埜半助		中井半三郎				草郷清四郎	中埜半左衛門	中埜良吉	
	7	長坂重孝	小栗平蔵	盛田善平	中埜又左衛門	中埜半助						草郷清四郎	中埜半左衛門	中埜良吉	
1906	1	長坂重孝	小栗平蔵	盛田善平	中埜又左衛門	中埜半助					須永隆	草郷清四郎	中埜半左衛門	中埜良吉	
	7	長坂重孝			中埜又左衛門	中埜半助	中埜半左衛門	小栗平蔵	中埜良吉	盛田善平	須永隆	草郷清四郎	榊原孝平	杉浦吉之助	
1907	1	根津嘉一郎	長坂重孝	中埜良吉	浅田正文	佐竹作太郎	平沼延次郎	福澤桃介	…	…	…	村上定	小野金六	盛田善平	…
	7	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…
1908	1	根津嘉一郎	長坂重孝	日置藤夫	浅田正文	佐竹作太郎	藤本清兵衛		中埜良吉			村上定	中埜半助		
	7	根津嘉一郎	長坂重孝	日置藤夫	浅田正文	佐竹作太郎	藤本清兵衛		中埜良吉			村上定	中埜半助		

注１）「…」は不明。

注２）1901年７月の盛田善平は、常務取締役兼支配人

注３）1906年に日本第一麦酒株式会社に、1908年に加登富麦酒株式会社へ社名変更。

注４）1907年１月の役員は、1906年丸三麦酒臨時株主総会結果に基づいて記載した。

資料）丸三麦酒株式会社『決算報告』『営業報告』『報告』各期。

1908年１月と７月のみ、加富登ビール『決算報告』。

表４　丸三麦酒の設備資金調達

年	月	固定資産（A）											長期資金（B）					長期資金余裕金 (B)－(A)	社債
		地所	建物	機械	器具	什器	仮出金						払込株金	積立金準備金関係	当期純益金	前期繰越金			
							諸口	建築	機械	醸造用器具	原料								
1897	1	7,068	733			622	34,993					43,416	150,000		82		150,082	106,666	
	7	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…
1898	1	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…
	7	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…
1899	1	12,243	9,934	111,067	568	1,014	10,187	146,667	38,135	39,293	10,016	379,123	420,055	294	▲4,096	1,767	422,117	42,993	
	7	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…
1900	1	13,462	162,370	197,572	48,841	1,564	21,399					445,208	551,595	262	1,422		553,279	108,071	
	7	17,403	168,140	199,027	49,058	2,389	25,685					461,703	598,420	396	▲10,384	1,422	600,238	138,535	
1901	1	19,448	169,385	208,949	50,446	3,795	38,816					490,840	600,000	398	▲1,195	▲8,962	600,398	109,559	
	7	19,448	169,385	210,137	50,545	4,877	37,529					491,920	600,000	458	3,037	▲10,157	603,495	111,575	
1902	1	19,995	169,385	219,823	51,324	5,215	22,470					488,211	600,000	558	▲4,943	▲7,120	588,495	100,283	
	7	19,995	169,385	219,823	51,566	5,388	21,064					487,221	600,000	710	▲8,318	▲12,063	580,329	93,108	150,000
1903	1	19,995	169,385	219,823	51,566	5,422	22,299					488,490	600,000	859	▲9,740	▲20,382	570,737	82,247	150,000
	7	19,995	169,385	219,823	51,624	5,435	31,644					497,905	600,000	1,231	▲11,276	▲30,122	559,833	61,929	150,000
1904	1	19,995	169,385	223,403	52,040	5,706	16,718					487,246	600,000	1,391	▲25,992	▲41,398	534,001	46,755	150,000
	7	19,995	169,385	223,685	52,094	5,706	16,511					487,376	600,000	1,826	▲12,685	▲67,390	521,751	34,375	150,000
1905	1	19,995	169,385	223,685	51,997	5,706	16,755					487,523	600,000	2,232	▲15,269	▲80,075	605,888	19,365	150,000
	7	16,217	128,733	156,580	31,233	2,285	3,489					338,536	300,000	2,763	5,739		308,502	▲30,034	150,000
1906	1	16,217	128,733	157,100	31,175	2,310	5,132					340,666	300,000	3,000	16,656	5,739	325,395	▲15,271	150,000
	7	16,217	128,350	161,652	31,484	2,310						340,013	375,000	2,100	17,162	6,595	400,858	60,845	75,000
1907	1	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…
	7	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…
		興業費	興業費未決算	営業貸															
1908	1	490,242	177,276	208,233									1,087,500	7,850	49,618	10,224	1,155,192		
	7	589,749	247,591	273,719									1,314,195	10,350	53,695	11,342	1,389,583		

注１）「…」は不明。「▲」はマイナス。
注２）1901年７月の盛田善平は、常務取締役兼支配人
注３）1906年に日本第一麦酒株式会社に、1908年に加登富麦酒株式会社へ社名変更。
注４）1907年１月の役員は、1906年丸三麦酒臨時株主総会結果に基づいて記載した。
注５）1908年１月と７月は、固定資産の欄に、「興業費」「興業費未決算」「営業費」を記載した。
資料）丸三麦酒株式会社『決算報告』『営業報告』『報告』各期。
　　1908年１月と７月のみ、加富登ビール『決算報告』。

表５　丸三麦酒の主要株主の変遷

順位	1897年１月			1900年１月			1901年７月		
	名前	株数	出身地	名前	株数	出身地	名前	株数	出身地
1	中埜ナミ	772	愛知	中埜又左衛門	902	愛知	中埜又左衛門	902	愛知
2	田中清八	350	愛知	小栗富治郎	365	愛知	小栗富治郎	365	愛知
3	小栗富治郎	345	愛知	中埜半六	337	愛知	中埜半六	337	愛知
4	中井半三郎	280	東京	田中清八	280	愛知	中井半三郎	280	東京
5	中埜半六	257	愛知	中井半三郎	280	東京	岩瀬彌助	267	愛知
6	盛田善平	257	愛知	岩瀬彌助	267	愛知	盛田善平	257	愛知
7	鈴木宇兵衛	246	東京	盛田善平	257	愛知	田中清八	230	愛知
8	小栗三郎	208	愛知	小栗三郎	208	愛知	神谷富津	220	東京
9	丹羽昭陽	175	愛知	小栗平蔵	200	愛知	小栗三郎	208	愛知
10	小栗平蔵	162	愛知	神谷富律	200	愛知	小栗平蔵	200	愛知
11	前田泰	150	東京	カールローデ商會	180	神奈川	ゼームズジョンストン	200	神奈川
12	中埜半左衛門	130	愛知	中埜半左衛門	165	愛知	カールローデ商會	180	神奈川
13	中埜純平	130	愛知	中村平左衛門	150	愛知	中埜半左衛門	165	愛知
14	中埜半助	130	愛知	盛田久左衛門	130	愛知	中村平左衛門	150	愛知
15	中埜政助	130	愛知	中埜純平	130	愛知	中埜幸造	132	愛知
16	岩本彌左衛門	130	愛知	中埜半助	130	愛知	盛田久左衛門	130	愛知
17	中埜良吉	130	愛知	中埜良吉	130	愛知	中埜純平	130	愛知
18	盛田久左衛門	130	愛知	中埜幸造	130	愛知	中埜半助	130	愛知
19	服部乾太郎	120	愛知	尾關孝七	115	岐阜	中埜良吉	130	愛知
20	瀧兵右衛門	100	愛知	小寺成蔵	100	岐阜	エフ・ナッホルヅ	125	神奈川
	西浦仁三郎	100	愛知	瀧兵右衛門	100	愛知			
	丹羽隼人	100	愛知	山内正義	100	愛知			
	山内正義	100	愛知						
小計	上位20人	4,332	36.1%	上位20人	4,656	38.8%	上位20人	4,738	39.5%
合計	690名	12,000	100.0%	653人	12,000	100.0%	624名	12,000	100%

資料）丸三麦酒株式会社『第壹回報告書』1897年１月。
丸三麦酒株式会社『第四回營業報告書』1900年１月。
丸三麦酒株式会社『第七回營業報告書』1901年７月。

を導入するものの、当期純益金のマイナスは続き、経営の改善は見られなかった。そのため、1905年７月から払込資本金30万円を減額することで損失補てんを図った。しかし、経営は根本的に好転せず、1906年に日本第一麦酒株式会社に改組することになった。この結果、資本金は3,000,000円規模（払込株金は、1908年１月時点で1,087,500円）へと急速に拡大した。

丸三麦酒の自己資金を支えた主要株主の構成について表５を用いて検討する。1897年１月には、地元の愛知県出身の出資者が大半を占めていた。特に筆頭株主の中埜ナミ（創業者の４代目中埜又左衛門の夫人）[21]や中埜半六、盛田善平など中埜家と盛田家が上位株主に位置していた。加えて、小栗富治郎、田中清八、小栗平蔵など知多地方の有力資産家が上位にランクインしている。本稿で対象とする小栗三郎は、地元出資者として創業時から208株を維持し、有力株主として関与していた。ただし、1900年以降には、愛知県外からの出資者が目立つようになった。特に、カールローデ商會、セームズジョンストンなどが上位株主となるなど株主構成は次第に変化を見せていた。

21）４代目中埜又左衛門は、1895年に亡くなっていた。その所有株式を妻の中埜ナミが引き継いでいたと考えられる。株式会社中埜酢店『七人の又左衛門』郁文舎，1986年，60頁。

〔2〕 丸三麦酒と小栗三郎

（1） 丸三麦酒の誕生と小栗三郎

丸三麦酒の設立は、中埜又左衛門と盛田善平が創業を企画することで始まった。盛田善平の自伝に「半田の中埜家がビールの醸造を思いついたのは、もともと「ミツカン酢」の醸造元であったことと、新時代の飲み物としてビールが脚光を浴び、もし中埜家でビールを醸造販売すれば酢の販売ルートに乗せることが出来るからであった（下線：筆者）」[22] と記されたように、中埜家が自社の事業拡大を目論んだことがそのきっかけだった。

そのため、役員構成についても、中埜又左衛門と盛田善平が主導権を握った。当時の中埜又左衛門の言葉によれば、「それでは別会社を造って、大々的にやることにしようか。株主を多くするととかく悶着が起り易いから、極く内輪のものだけにしてガッチリと固めてやるんだ。さしあたって本家（中埜）の一族と、小栗家と田中家と、お前（＝盛田善平：筆者）の内で応分の出資をすることにしよう。（下線：筆者）」[23] とある。丸三麦酒の出資者は、中埜家と盛田家、そして田中平八と小栗平蔵など[24] の酒造業を営む資産家に絞られたのである。

それでは、知多地方の企業勃興を支えた有力資産家と丸三麦酒との関係を詳しく検討する。表６は、知多地方の有力企業とその経営に関わった有力資産家を取り上げたものである。これによれば、知多地方において、半田町では知多紡績（資本金100万円）と丸三麦酒（資本金60万円）の２社が極めて大規模な企業だったことがわかる。加えて、その経営に関わった資産家は、小栗富治郎や小栗平蔵、田中清八、中埜半左衛門など半田町の有力資産家で占められていた。家業は醤油醸造業や米穀肥料商そして酒類製造で、地域的な名声も高かった。例えば、田中清八は、「田中酒造會社代表社員、同社は今より八十餘年前の開始になり、銘酒『清正』は愛酒家の賞揚し措かざる所なり。」[25] と酒造業を本業としており、加えて、「君聲望あり町議員、郡議員、知多豊醸組合長に任じ令名高し。」[26] と地域の信望も厚かった。

とはいえ、この２社の役員構成には違いも見られた。知多紡績の場合は、端山忠左衛門（武豊町）や竹之内源助（岡田町）などの半田町外の広範囲な資産家が加わっている。それに対して丸三麦酒の場合は、小鈴谷村の盛田久左衛門が役員として加わっているが、むしろ

22）「パン半世紀―シキシマパンの歩み」（竹内進編『資料　カブトビール』1996年，95頁）。

23）「パン半世紀―シキシマパンの歩み』（竹内進編『資料　カブトビール』1996年，98頁）。

24）田中清八と小栗平蔵は、中埜又左衛門の別家に位置する。特に、中埜又左衛門は小栗平蔵の酒造業に対して、明治20年に3,400円出資していた。「中埜財閥の形成」『地方金融史研究』第16号，1985年３月，25-26頁。

25）加藤眞吾・肥後蘇川共編『知多寶鑑』春秋新報出版部，1926年11月，195頁。

26）加藤眞吾・肥後蘇川共編『知多寶鑑』春秋新報出版部，1926年11月，195頁。

表6　　知多郡における資産家の兼任役員（1897年）

番号	名前	郡内兼任数	町村	家業	所得税額（千円）	営業税額（千円）	所在	半田町			亀崎町		大野町			野間村	小鈴谷村
							社名	知多紡績	丸三麦酒	半田汽船	亀崎銀行	衣浦貯金銀行	共同尾白	大野米肥	大野油商	野間商船	知多航業
							形態	株式会社	株式会社	株式会社	株式会社	株式会社	株式会社	株式会社	株式会社	株式会社	株式会社
							設立（年）	1896	1896	1881	1893	1895	1889	1895	1893	1891	1886
							設立（月）	11	9	8	6	5	4	5	4	6	9
							払込金（千円）	250	150	50	675	50	83	43	35	50	100
							資本金（千円）	1,000	600	50	800	100	90	80	70	50	200
1	小栗七左衛門			醤油醸造兼度量衡販売	17	37		取									
2	小栗政治郎	2						監			監						
3	**小栗富治郎**	4		酒類醤油製造	287	255		取会	取		取						
4	小栗三郎	3		米穀肥料商	72	525		取	監								
5	**小栗平蔵**	4		酒類醸造	149	161		取	取	取							
6	小泉吉彦							支									
7	**田中清八**	4	半田町	酒類醸造	209	135		取	取	専取							
8	中野半助							取									
9	中埜半左衛門	2						監	取社								
10	中埜半六	2		倉庫業	144	56			取								
11	中埜良吉								取								
12	小坂久之助									監							
13	竹本英一	3								取							
14	天野伊左衛門	2									頭取						
15	井口半兵衛	2		米穀肥料商兼委託販売	94	185					取	監					
16	伊東孫左衛門	3		清酒醸造兼味噌製造	253	162					取	専取					
17	稲生治右衛門	3	亀崎町	清酒醸造	47	98					取						
18	新美昇平	2		生糸製造米穀肥料委託問屋	51	281					取	取					
19	新美治郎八	2		入舟木問屋	9	71					監	支					
20	中島正久										副支						
21	間瀬寛治										豊橋主任						
22	榊原伊助		成岩町	清酒醸造業								監					
23	端山忠左衛門	2	武豊町	農				専取									
24	中井米太郎	2	旭村											監			
25	竹之内源助		岡田町	白木綿商				監									
26	鈴木藤兵衛														取		
27	中村伊助	2		木綿油商											社長		
28	新美文次郎	2											取				
29	西尾吉次郎														監		
30	間瀬定吉												取				
31	皆川藤七		大野町	呉服古着商										監			
32	宮嶋辰之助												専取				
33	片山茂助	2												取	取		
34	塚本清八	2												取	監		
35	平野助三郎	3												社長	監		
36	関栄助	2	常滑町	醤油醸造所									取				
37	関幸助	3		木綿製造卸売業	7	29							取				
38	竹内常助		西之口村												専取		
39	盛田久左衛門	3		清酒醸造業					監			取					取
40	天木嘉祐	3	小鈴谷村														社長
41	陸井太右衛門	2															監
42	山本清助	2															取・支
43	夏目甚七	3														監	
44	**夏目仲助**	4	野間村													監	副社長
45	森下長五郎	3														取	監
46	森田伊助			味噌溜製造業												専取	
47	久野藤助		大高町	高等清酒													取
48	渡部巌		祖父江町							監							
49	岡本八右衛門	2	新川町									取					
	その他住所不明の役員数								3名	1名	9名			1名	1名	1名	2名

注1）払込資本金の上位10企業を取り上げた（知多郡内では56企業）。
注2）「取」は取締役、「監」は監査役、「支」は支配人、「取会」は取締役会長、「取社」は取締役社長、「専取」は専務取締役、「副支」は副支配人。
注3）郡内兼任社数が4社を超えるメンバーは、下線を付した。
注4）自身の町村内所在の企業の役員になっている場合は、アミで示した。
資料）『日本全国緒会社役員録　第5回』商業興信所（由井常彦・浅野俊光編集解説復刻版，柏書房，1988年）。
『日本全国商工人名録　第2版』（渋谷隆一編，『都道府県別資産地主総覧　愛知編3』，1997年）。

中埜家との血縁関係の繋がりがその基盤であった。つまり、丸三麦酒は、＜血縁グループ〔中埜家―盛田家〕＞と＜半田町グループ〔中埜家・小栗富治郎・小栗三郎・田中清八〕＞とが結合して、役員が構成されていたのである。このなかで、小栗三郎家は、半田町グループの一員に位置付けられていた。

（2） 小栗三郎の離脱

1900年６月、小栗三郎は、監査役を辞任して丸三麦酒から離脱した。これは、半田町グループからの離脱を意味するものであった。小栗三郎家の文書には、1898年11月15日付けで、知多紡績と丸三麦酒の辞任届が遺されている[27]。だとすれば、小栗三郎は、丸三麦酒の発足直後に役員の辞職を決意していたことになる。この資料から推察すると、小栗三郎は、ビール事業や紡績事業に積極的ではなかったと考えられる。その一方で、小栗三郎の事業や萬三商店の業務内容を記した資料によれば、「萬三商店、肥料醤油製造業。文政年間の創業に罹り、爾來純然たる商業を標的となし來り、現今大豆、大豆粕の輸入販賣雑穀及各種の肥料販賣、大豆粕の製造、醤油醸造業を経営し全國的に名聲と信用を博す。（下線：筆者）」[28]と記されたように、小栗三郎は肥料醤油製造業での事業拡大に積極的であった。このため、小栗三郎は、ビール事業の経営に関心は薄く、中埜家・盛田家から出資や役員就任の要請に基づいて参加したに過ぎなかったと考えられる。一方、中埜家・盛田家にとっても、地域の名声と潤沢な資金を有しながら、経営には関与しない小栗三郎の存在は貴重であった。つまり、半田町グループの資産家のなかでも、小栗三郎は、中埜又左衛門・盛田善平とは異なった企業関与を示したのである。

（3） 小栗三郎の離脱後
―有力株主との内紛

小栗三郎の離脱後、常務取締役の盛田善平と有力株主との間で対立が起こった。その発端は、1902年１月25日の株主総会で実施された監査役・取締役の改選であった。この総会で、取締役の中埜良吉の辞任に伴って岩瀬弥助の役員当選が決定した[29]。岩瀬弥助は、愛知県西尾市の資産家で、1901年７月時点で丸三麦酒株を267株も有する有力株主であった。しかし、岩瀬弥助は取締役就任を辞退した。この要因は、専務取締役・盛田善平との対立が存在していたからであった。この経緯を示した手紙が、岩瀬弥助から小栗三郎へ送付されていた。そ

27）「丸三麦酒株式會社書類」147-9。
28）加藤眞吾・肥後蘇川共編『知多寶鑑』春秋新報出版部，1926年11月，171頁。
29）愛知県半田市『半田市誌　資料編Ⅰ』1968年，495頁。

の書面から、この対立の内実を明らかにしていく。

そもそも岩瀬弥助は、当時の丸三麦酒の経営を問題視していた。手紙の文面には、「該社ハ去ル明治三十貳年七月新器械ノ麥酒發売以來業務ノ成績上多少見ルヘキモノアリト雖モ已ニ計算期ヲ重ルコト實ニ五回ニ及ヘリシ而ルモ尚利益ヲ得ルナク反テ昨卅四年下半期ニ於テハ金壹万貳千余圓ノ欠損ヲ残セリ（下線：筆者）」[30] と、丸三麦酒の損失の増大が深刻化していることを的確に指摘していた。そのため、岩瀬は、相談役（３名）の設置を盛田善平へ要求した。この手紙には、「定款第卅九條ノ規定ニヨリ株主中ヨリ相談役ヲ選任シ役員ト共ニ會社経營上ノ事ヲ商議シ之カ改善ヲ圖ルコト（下線：筆者）」[31] とあるように、岩瀬はこの相談役を設置することで経営の舵取り役を増やし、経営の改善を企図していた。この提案は、丸三麦酒の定款に取決められた正当な要求であった。

この提案に対して盛田善平は、いったん同意するも結局は却下を決断した。この経緯について、岩瀬の手紙には、「足下（余ヲ指シテ）ヲ取締役ニ選定セルハ相談役ニ代ユルノ意ヲ含メリ故ニ相談役ヲ置クノ必要ヲ認メス（下線：筆者）」[32] と記されている。つまり盛田善平は、相談役を設定しない代わりに、岩瀬弥助を取締役とすることで事態の収束を図ったのである。

しかし、岩瀬弥助は、この措置に対して盛田善平への不信感を高め、取締役就任を拒否した。手紙には、「之ヲ要スルニ會社役員ハ初メ速カニ相談役設置ノ提議ニ仝意ヲ表セシニモ不拘央ゴロ稍々態度ヲ變セシヤヲ疑ヒシニ果シテ終ニハ謂ハレナク前言ヲ食ムニ至レリ如斯會社ノ役員ハ實ニ二枚ノ舌頭能ク余輩ヲ飜弄侮蔑セリト（下線：筆者）」[33] と記している。この推移から盛田善平の意図を推察すると、盛田善平は、相談役（３人）を新たに設置することは、経営の意思決定者が拡大して経営の舵取りが難しくなるため受け入れ難かったと考えられる。しかし、有力株主の岩瀬弥助の要望は定款で取り決められたものでもあったため無視できなかった。そのため、岩瀬一人のみを取締役に取り込むことで事態を収束しようとした。しかし、この決定は、岩瀬弥助の不信感をいっそう強める結果となり、対立は深刻なものとなった。つまり、丸三麦酒では、中埜家・盛田家中心の役員構成は維持されたものの、この内紛によって亀裂が生じたのである。

30)「丸三麦酒株式會社書類」147-4。
31)「丸三麦酒株式會社書類」147-4。
32)「丸三麦酒株式會社書類」147-4。
33)「丸三麦酒株式會社書類」147-4。

〔3〕 丸三麦酒から日本第一麦酒へ

（1） ビール産業の寡占と丸三麦酒の経営不振

ビール業界は、明治20年代では企業乱立状態であったが、明治30年代になると企業間の優劣がはっきりと現れるようになった。その有力企業は、札幌麦酒、日本麦酒、大阪麦酒そしてジャパン・ブルワリーに絞られ、丸三麦酒も肩を並べるようになった[34]。

日露戦後になると、ビール醸造高は約16万石に達して輸出もみられ、業界の競争も激しくなった。そのため、日本麦酒の馬越恭平、札幌麦酒の渋沢栄一と大倉喜八郎は、同業者間の競争を避けて海外への販路を広げるべく、合併を模索するようになった。その結果、1906年３月に、日本麦酒と大阪麦酒そして札幌麦酒の３社が合併し大日本麦酒が誕生した[35]。表２で、1906年の上位企業のシェアを確認すると、ビール産業は、大日本麦酒と麒麟麦酒の上位２社で90％を超えるまでに寡占が進んだことが確認できる。つまり、丸三麦酒は、資本金を増額して営業規模を拡大しなければ、全国的市場で競争できない状況に陥ったのである。しかし、丸三麦酒は、1905年７月に払込資本金を30万円へ減額する事態に陥っており（表４）、厳しい経営を余儀なくされていた。『サッポロビール120年史』に、「新工場、ドイツ人技術者、新ラベルと外見は華やかにスタートした丸三麦酒ではあったが、会社設立以来ほとんど赤字の連続であった」[36] と記録されているのは、こうした丸三麦酒の苦難の経営を現していた。取締役社長の中埜又左衛門（５代目）は、ビールの販売量を増大させるために、東京の特約店中井半三郎や販売会社中泉現金店（盛田山泉商会と共同で設立）を通じて販売に力を入れ、名古屋にも中埜酢店を出店してビール販売網を強化した[37]。それだけでなく、丸三麦酒も、名古屋に出張店を出した。『新愛知』に、「カブトビール出張店設置　カブトビール販賣廣張に付今回名古屋市榮町四丁目へ本社出張店を設け社員渡邊瀧三郎を主任とし大々的勉強致候間倍舊引立被成度奉願候　丸三麥酒株式會社」[38] と記されているように、1906年６月においても丸三麦酒は新販路開拓へと意欲を示したのである。しかし、盛田善平の自伝に、「…日露戦争後の反動期に入って財界は不振を極め、倒産者も相つぐという不況となったからである。いつの時代でも不況の風当たりが強くて早いのは、花柳界や料亭である。善平の宣伝によって、折角メーカーを圧するほどの売行きを示したカブトビールも、倉庫は滞貨の山となり、生産制限を余儀なくされる情勢となった。（下線：筆者）」[39] と記されたように、

34）有沢広巳監修『日本産業百年史　上』日経新書、1967年、182頁。
35）有沢広巳監修『日本産業百年史　上』日経新書、1967年、182-183頁。
36）『サッポロビール120年史』サッポロビール株式会社（1996），190頁。
37）株式会社中埜酢店『七人の又左衛門』郁文舎，1986年，61頁。
38）「カブトビール出張店設置」『新愛知』，1906年６月22日。
39）「パン半世紀―シキシマパンの歩み」（竹内進編『資料　カブトビール』1996年，99頁）。

丸三麦酒の生産量は縮小を余儀なくされた。この丸三麦酒の経営不振を受けて、中埜又左衛門と盛田善平は、合併を模索するようになった。

（2） 丸三麦酒の改組

丸三麦酒は、経営不振を打開すべく、大日本麦酒の馬越恭平へ統合を打診した。しかし、この統合案件は実現しなかった。福澤桃介が、根津嘉一郎と組んで大日本麦酒に先駆けて丸三麦酒を買収したからである。資料には、「そのころ馬越恭平翁は日本全国のビール会社を一手に掌握せんと画策し、丸三麦酒と買収の交渉中であった。このことについて馬越が不用意に口外したのを福沢桃介が聞き、根津嘉一郎を誘った。根津は機先を制して丸三麦酒を買収してしまった。（下線：筆者）」[40] とあるように、馬越の統合案件を聞いた福澤桃介が根津を通じて丸三麦酒を買収したのである。

1906年10月、丸三麦酒は、日本第一麦酒株式会社へと改組した。資本金は300万円へ増額し、社長は根津嘉一郎、取締役に福澤桃介が就任した（表３）。本社は東京へ移転し、役員は大きく刷新された[41]。一方で、丸三麦酒を創業した中埜家と盛田家は、次第に自身の事業へとシフトしていった。中埜又左衛門は、丸三麦酒の社債を、明治36年時に33,614円も有していたが、明治45年には全て手放した。そして、交通運輸関係など全国規模の有力会社へと出資して[42]、本業の製酢業へ力を注ぐことになった[43]。そして盛田善平は、「敷島屋製粉場の経営に任じ夙に炯眼卓識の聞へあり、實業界に燦然頭角を爲す」[44] と記されたように、製粉事業へ主軸を移していったのである[45]。

（3） 改組後の丸三麦酒

日本第一麦酒は、1908年７月に加富登麦酒株式会社へ社名変更し、経営は発展の道を歩んだ。ビール業界の競争は激しさを増していたが、当時を伝える資料に「大正のはじめにはだいぶ整理されて、大日本と、麒麟と、加富登と、帝国の四社になっていた。」[46] と記されるように、ビール産業の寡占化が進み、中小麦酒会社が淘汰されるなかで、丸三麦酒は有力企

40）三宅勇三『ビールレーベル興亡史』1964年，20頁。
41）『半田市誌　本文篇』（1971）愛知県半田市，480頁。
42）『半田市誌　本文篇』（1971）愛知県半田市，482-483頁。
43）この後、中埜一族は、中埜銀行が一族の資金需給を調整する役割を担い、搾乳業や醸造業を営んでいくことになった。「中埜財閥の形成」『地方金融史研究』第16号，1985年３月，39頁。
44）加藤眞吾・肥後蘇川共編『知多寶鑑』春秋新報出版部，1926年11月，172頁。
45）「パン半世紀―シキシマパンの歩み」（竹内進編『資料　カブトビール』1996年，100-101頁）。
46）植田敏郎『ビールのすべて』中央公論社，1962年，75頁。

業の一翼を担うようになった[47]。

そして1921年５月、加富登麦酒は帝国鉱泉株式会社と日本製壜株式会社と合併し、日本麦酒鉱泉株式会社となった。日本麦酒鉱泉株式会社は経営規模をいっそう拡大し、1921年時点で生産量は36,306石に達した（表２参照）。『大日本麦酒株式會社三十年史』に「明治三十九年十月、根津氏の経営に移つてからは漸次資本金を増加して終に二千萬圓の大會社となつたのであるが、この間種々の新しい販賣政策を採用して販路の開拓に努むると同時に、鋭意生産費の低減を図つて大に見るべきものがあつた。（下線：筆者）」[48] と記されている。これは、根津嘉一郎の経営手腕と資金力で丸三麦酒は再生へと向かったことを示していた[49]。

おわりに

本稿は、知多地方を拠点に創業した丸三麦酒を取り上げ、その経営の実態を具体的に分析することで、近代日本のビール業界の発展像を描いてきた。それを踏まえて本稿の結論を２点にまとめたい。

第１に、丸三麦酒の経営の実態とビール業界に与えた影響である。丸三麦酒は、知多の有力資産家によって設立され、豊富な自己資金を基盤に近代的なビール企業として創業した。そして、大阪麦酒や札幌麦酒、日本麦酒、そして麒麟麦酒に続く有力ビール会社として活躍した。しかし、その経営は、創業以来から赤字経営が続き、1906年には、馬越・根津間の買収をめぐる争奪戦の対象となった。日本第一麦酒へと改組した後は、根津の経営手腕によって成長し、大日本麦酒や麒麟麦酒への対抗軸としてビール業界での地位を確立した。この結果、大日本麦酒や麒麟麦酒など巨大企業の寡占が弱まり、1921年には桜麦酒なども台頭するなど、後発ビール企業の活躍も見られるようになった。

第２に、丸三麦酒と知多財界に関する点である。知多地方の資産家は、全国屈指のビール会社を作り出すほどの資金力を有していた。しかし、半田町の地縁を基盤とした資産家グループは、丸三麦酒の企業設立には貢献するが、経営への関わりには総じて消極的で、継続性もまとまりも弱かった。これに対して、血縁を基盤とする中埜家と盛田家は、企業経営に強く影響を与えた。とはいえ、中埜家と盛田家主導の丸三麦酒の経営は一貫して不振であったため、知多資産家への株式配当は振るわなかった。このため、有力株主の強い不満にさら

47）有沢広巳監修『日本産業百年史　上』日経新書、1967年、183頁。

48）『大日本麦酒株式會社三十年史』大日本麦酒株式會社，1936年，31頁。

49）この後、日本麦酒鉱泉は、1933年に大日本麦酒と合併した。この合併直前、日本麦酒鉱泉は、約340店の特約店を有しており、大日本麦酒の特約店数（212店）と比べて多かった。この販売力の強さが成長の一員であったと考えられる。丹治雄一「大日本麦酒の経営と販売網―ビール業成長期下の経営活動と特約販売網の整備―」『社会経済史学』第67巻第３号，2001年９月，19-21頁。

されることになった。つまり、中埜家と盛田家が企業関与を強めれば強めるほど、有力資産家との溝は深まる結果となったのである。この企業関与の違いは、中埜又左衛門・盛田善平と小栗三郎に見られた投資姿勢の違いに要因があった。中埜家と盛田家は、家業ビジネスの拡大には積極的で血縁に基づいたグループが経営を掌握することにこだわった。ただし事業の継続には固執しなかった。そのため、ビール事業の経営が振るわず見通しが明るくないと判断すると、中埜又左衛門は中央資本と家業、盛田善平は製粉事業へと切り替えていった。つまり、丸三麦酒というプロジェクトは、あくまで中埜家と盛田家の事業展開の一環だったのである。それに対して小栗三郎は、家業を重視する姿勢を堅持した。それゆえ、地域企業の経営には一貫して消極的な姿勢を示し、地域の企業設立や株式募集への「看板」役を引き受けるという関わり方を維持した。つまり、地域で構成された資産家グループは、それぞれ異なった動機を有しており、それゆえ企業関与の行動様式は多様化したのである。

〔付記〕 本稿は、科学研究費（基盤研究（B）醸造業による農村工業化と和食文化の形成に関する地域比較研究（代表者：井奥成彦））の研究成果の一部である。